

全日本語りネットワーク

2009. 8. 25 発行

〒376-0045 群馬県桐生市末広町 5-11 JR 駅構内
桐生市市民活動推進センター

(Fax) 0277-47-4066 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) <http://japankatarinet.jp/>

ニュース

絵本『かっぱのすりばち』誕生までのこと

廣田弘子 (埼玉県入間市)

3年前の会津「第8回全日本語りの祭り」で菊池トヨさん(東白川郡塙町)に出会った。トヨさんの方言の語りは自然体で生き生きとして、情感豊かで、人生の味わいに満ちていた。

19歳で嫁に来て、37歳まで姑と小姑と夫に仕え、口答え一つせず黙して語らなかつたというトヨさん「それでも頭ん中は賑やかだったよー」という。唯一、好きだったのは読書だが、幼い頃に隣の「ばっばさん」や「おうめさん」から聞いた話をずっと頭の中で繰り返して、繰り返して聞いていたらしい。

トヨさんが語ってくれた、かっぱの親子の話、実際に「かっぱのすりばち」を見に行き、かっぱの出てきそうな遊歩道を歩くと、お話が本当にあったことのように思えた。

保育園の子どもたちに語ったら、真剣に涙をためて話を聞いた。それを見ていた園長が「いい話だから絵本にしよう」という。園長は某仏教系の出版社の、絵本の編集委員をやっていて、お話を探していた。

『かっぱのすりばち』は昔から語り継がれている話だと思っていたら、原作者がいた。地元の小学校の校長先生で、菊池トヨさんが語る100の話を録音、記録し、2冊の本にまとめた佐藤修氏だ。かっぱのすりばち遊歩道整備が始まったとき、菊池トヨさんに語ってほしいと、創作されたとい

う。

佐藤修氏に再話の許可を得て、画家の藤原あずみさん

と、取材の旅に出かけた。かっぱのすりばち遊歩道は奥入瀬のような美しさで、谷川の石には水草がしげり、石の下からかっぱの目玉が覗いているようだった。

しばらくして、藤原さんの絵が送られてきた。みずみずしい濃淡の緑、まさに方貝の川そのもの、命が吹き込まれた素晴らしい絵だった。しかし、この絵本には死が3回も出てくる。幼い子たちに死の話は厳しく、納得できる死として描かれていないということで、この絵本は出版できないことになった。

しかし、私たちはこの絵本には魂がこもっていると、感じていた。仲間に読み聞かせると、絵がととても素敵で、聞き応えのあるいい本だと口をそろえていってくれた。楽しい話や、面白い話と同じように、悲しい話も子どもたちに聞いてほしい。

紆余曲折はあったが、一声社からの出版が決まり、同時に塙の町から町おこしの助成金の応援も受けられて、『かっぱのすりばち』は絵本になった。たくさんの方々から、良い感想を戴き、塙の町では読み聞かせ会も開催されている。たくさんの人たちに読んでもらえることを、願っている。



一声社 2009 年刊